（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	山根　聡
論文題目	「イスラーム受容体」としてのパキスタン ―言語・文学・政治・社会の史的変容とその動態的研究―		

（論文内容の要旨）

本論文は、南アジア地域研究の中でも重要な位置を占めるパキスタンをめぐって、その地域的特性を明らかにするために「イスラーム受容体」という分析概念を設定した上で、特に言語、文学、政治、社会の動態的な史的変容に着目して考察をおこなっている。

第1章では、まず、パキスタンを南アジアとイスラームが交差する特性の面から解明するために設定した「イスラーム受容体」について詳しく論じている。この概念は生体的な「受容体」の概念を援用したもので、受容体は外的要因を一方的に受容する存在ではあく「拒絶反応」も起こしうるもので、選択的な受容がなされると定義されている。

第2章では、ヒンドスターニー語が宗教文化を軸としてウルドゥー語とヒンディー語とに分岐した過程を、19世紀におけるウルドゥー語の「イスラーム化」として種々の実例から分析している。

第3章では、当時のデリーを「騒擾の町」として描く文学ジャンルを素材として、デリーが「インド・イスラーム都市」として表象される様態を、哀悼詩などの豊富な邦訳を交えて析出している。

第4章では、詩人ミルザー・ガーリブの書簡を用いて19世紀半ばのデリーにおけるイスラームの文学的表現を析出している。それは同時に「南アジア・イスラーム史資料」としてウルドゥー文学を用いることができることを証明するものとなっており、原典史料の紹介としても貴重なものである。

第5章では、近現代北インドにおける言語状況を俯瞰した上で、知識人の形成、近代教育・イスラーム教育の大衆化、メディアの発達などとあいまって、ウルドゥー語とイスラームの親和性が増してきたことを考察している。

第6章では、社会や日常生活におけるイスラームの実態として、食文化の問題を通して英領期インドのムスリムがイスラーム性を強めていった過程を明らかにしている。

第7章では、インドとパキスタンが分離独立へ向かう過程と独立後のパキスタンで大きな役割を果たした思想家として、イクバールとマウドゥーディーを取り上げて、ムスリムの政治運動の展開を検証している。

第8章では、イクバールがヨーロッパ留学を経てムスリムとして覚醒していく過程を考察している。イクバールが近代ヨーロッパと邂逅して、ムスリムとしての自覚

を深めた過程が、後にパキスタンの国民的詩人となったイクバールの作品の紹介と共に、実証的に論じられている。

第9章では、近代化を経た新興のムスリム知識人たちの間で、独立過程において「イスラームの地」をめぐる大きな議論が生じたことを分析している。また、この概念が独立後のパキスタンに与えた思想的な意義についても論究している。

第10章では、イスラーム世界全体の課題として登場した「パレスチナ問題」を南アジアのムスリムがどのように認識したかを現代ウルドゥー語詩から明らかにしている。また彼らが大きな国際問題と主体的に向き合い、ムスリム同士の連帯感を持つことを通してアイデンティティ形成がおこなった過程を分析すると共に、そのような過程が起きることが「イスラーム受容体」の特徴の1つであると論じている。

第11章では、現代パキスタンにとって大きな社会的・政治的な意味を持つ諸問題として臓器移植という先端医療を事例に、近代科学・生命倫理・宗教の関係を考究している。この問題に関わるイスラーム法学的な諸論点も合わせて明らかにされている。

第12章では、女性自立の問題を、女性運動の指導者と彼女が設立したＮＧＯの事例から論究している。

第13章では、民主政治と軍部、宗教界、メディアの相関関係を俯瞰し、なぜ民主化と軍政の交代が繰り返されてきたのかについても考察をおこない、一見するとジグザグの道をたどりつつも、次第に民衆の政治参加が進んでいることを明らかにしている。

第14章では、2001年の9・11事件以降に世界化した「対テロ戦争」がパキスタンを「前線」として展開されたことを、細かな歴史的事実の掘り起こしと共に考察している。

第15章では、「対テロ戦争」と隣国アフガニスタンに接する連邦直轄部族地域の社会変容がどのように結びついたかを、貴重なデータを基に論究している。

最後に結論では、歴史的な南アジアの「イスラーム化」を背景としながら、「イスラーム受容体」としてのパキスタンが19～20世紀に変容を続けてきた動態について、全体的な議論をおこない、「イスラーム受容体」の概念にはパキスタンを分析する上での有効性と地域間比較のための有用性が認められると総括している。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

1947年にインドと分離独立したパキスタン（およびそれ以前の英領インドの中のイスラーム地域）はこれまで、分離独立以降の南アジア地域研究がインドやヒンドゥー教、ヒンディー語圏を中心とする側面を濃厚に持ったため、「二重の周縁化」がなされる中で論じられてきた。つまり、南アジアにおいてイスラームが「周縁化」されたのみならず、かつて南アジアのイスラームを研究対象とする研究者がイスラーム研究で重きをなしたのと比べて、イスラーム世界研究の中でも南アジア・イスラームが「周縁化」されたのである。それに対して、本論文は、南アジアのイスラーム地域、特に今日のパキスタンの領域を対象として、周縁化を超える重厚な研究を展開し、南アジアを理解する上でもイスラーム世界を理解する上でも欠かせない新たな知見を数多く示している。

本論文の意義として、以下の5点が挙げられる。

第1に、ウルドゥー文学を中心とする原典の翻訳を交えた分析を綿密におこない、ウルドゥー語が19世紀後半以降に、イスラームやムスリムの心情や社会問題を表現することのできる言語として発展したことを非常に実証的に示した点である。イスラーム地域としてのパキスタンの文芸的・思想的伝統とその現代的展開の研究に、大きな学術的貢献をしている。

第2に、南アジアでは近年、イスラームもヒンドゥー教も宗教復興がいっそう強まっており、宗教を踏まえた地域の実態を解明することの重要性が増しているが、宗教と社会について現地調査と文献調査を結合した本論文には、その面での地域研究における有意な貢献が認められる。

第3に、「受容体」という生体のメカニズムを援用した「イスラーム受容体」という概念を提示し、歴史的にイスラーム化が進んできた地域を捉えるための新しい枠組を確立したことが高く評価される。受容体は一方的に外的要因を受容するわけではなく、時に拒絶反応を示すものとされる。この有用な概念を、たとえば東南アジア、中央アジアなどにも適用して、イスラーム世界の中の地域間比較をすることも可能であろう。

第4に、南アジア地域研究の中でこれまで研究蓄積が限られてきたパキスタンについて、きわめて総合的・包括的な視点から史資料を徹底して発掘して非常に重厚な考察を重ねたことは、今後の研究の基礎を提供するものとして大きな寄与をなすものである。

第5に、近年のイスラームと関わる「テロ」問題について、地域の内在的な論点から考察した優れた研究成果を提供している。「テロ」に関する研究は、ともすると安全保障と結びついた政策的な視点に偏りがちで、「テロ」問題をパキスタン社会の固有の文脈と軍部やいわゆる「部族」の具体的な役割とを結びつけた本論文は、そのような限界を超える意義を持っている。

以上のように本論文は、南アジア地域研究、ウルドゥー文学研究、ウルドゥー語学、イスラーム思想史などを総合して、原典研究と臨地研究に基づいて大きな成果をあげた優れた研究である。また、パキスタン研究、イスラーム世界の地域間比較、「テロ」問題に関する国際関係学的な研究にも大きく寄与するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。